

研究者	所属・職位	氏名
	外国語学部ドイツ語学科・教授	木村護郎クリストフ
研究課題	・言語的多様性の管理 ・世俗社会における宗教の役割	
研究期間	2021年8月22日～2022年8月28日(372日間)	
主な研究機関 又は場所	ライプツィヒ大学(ドイツ・ライプツィヒ)	
研究成果の概要		
<p>1. 概要</p> <p>これまで、言語の多様性とどう向き合うかという基本テーマのもと、異言語間コミュニケーションの諸方略の適切な使い分け及び少数言語と多数派言語の共存可能性について検討してきた。また地域研究の一環として、ドイツの世俗社会において宗教が果たす役割について、主に環境・エネルギーの観点から調べてきた。今回の在外研究では、ドイツにおける異言語間コミュニケーション(媒介言語論)研究の中心となってきたライプツィヒ大学英語学科に受け入れていただいた。また同大学には、私が長年関わってきたスラヴ系の少数言語ソルブ語を専攻する世界唯一のソルブ学科があり、神学部では世俗化に関する研究プロジェクトが行われている。同大学はドイツ語教育研究でも名高い研究所を擁しているが、今回の滞在ではあえて主にこれらの他学部学科のセミナー等に参加し、ドイツまた自分にとって自明の存在としてのドイツ語を相対化するとともに、視野を広げることをめざした。</p> <p>前半は再びコロナ対策による規制が厳しくなり、後半はロシア軍のウクライナ侵攻の影響下にあった。主な研究地域であるドイツ・中欧の現地調査の見通しが立たず、研究予定は大幅な見直しを余儀なくされた。その分、かつてなく執筆・発表に注力することになった。執筆(下記)の他、学会・研究会発表(13回)、ライプツィヒ大学の3部科(英語学科、ソルブ学科、神学部)を含むドイツ、ポーランド、チェコの7大学での講演(11回)を行った。教育・大学業務・通勤に割く時間がなくなることでこれだけの時間が捻出できることは大きな驚きであった。結果として、現在関心を持っている全ての研究テーマについて、使用可能な全ての言語(日、独、英、ソルブ語、ポーランド語、エスペラント)で執筆・発表を行うことができた。またロシア・ウクライナ問題は、はからずもこれまで取り組んできたエネルギー問題の新たな焦点化や中東欧への関心の高まりをもたらし、一般向けの講演も計8回行った。</p> <p>共に現地滞在した妻および現地校に通った高校生の子ども2人の視点や経験をも通して、ドイツの地域社会や学校の日本との違いに瞠目したりあきれたりする日々で、生活自体が今後の研究・教育にとってきわめて重要な刺激となった。現代の著しい特徴である加速化を問い直すべく、郵便馬車での旅行に参加するなど(「郵便馬車からみたクルマ社会」『クルマ社会を問い直す』108号(https://kuruma-toinaosu.org/wp-content/uploads/2022/07/kt108.pdf))、日本の通常の生活では得られない貴重な体験もした。</p> <p>不穏な情勢のもとでの1年であったが、そのような情勢と向き合うためにも、研究地域に長期滞在することの意義は計り知れないほど大きく、このような機会を与えられたことを深く感謝している。</p>		

2. 在外研修中に執筆・刊行された主な原稿（書評等を除く）

[社会言語学理論]

「社会言語学に「言語」は必要か— ポストモダン言語論を問いなおす」『社会言語学』21 (2021)。

Why and how ideology matters for Language Management Theory, in: M. Nekula, T. Sherman & H. Zawiszová (eds.): *Interests and Power in Language Management*, Peter Lang (2022).

[異言語間コミュニケーション]

『異言語間コミュニケーションの方法—媒介言語をめぐる議論と実際』大修館書店 (2021)。

「異言語間コミュニケーション手段としての通訳のメリットとデメリット— ビジネス通訳の観点から」(高橋絹子と共著)『関西大学外国語学部紀要』25 (2021)。

Esperanto: Internationalism, dialogue, and an evolving community (with Gotoo Hitosi), in: J. C. Maher (ed.) *Language Communities in Japan*, Oxford University Press (2022).

Konsciigo pri interlingva komunikado en universitato [異言語間コミュニケーションの意識化教育], *Internacia Pedagogia Revuo* 2022/1.

「日本社会を開く妨げとしての英語偏重」村田和代編『越境者との共存にむけて』ひつじ書房 (2022)。

「異言語間コミュニケーションの一方略としての機械翻訳」『ことばと社会』24 (未刊行)。

「「やさしいことば」は誰のためか—ドイツの「やさしいことば」(Leichte Sprache)と「やさしい日本語」の比較から」庵功雄編『「やさしい日本語」の関連領域』(未刊行)。

Städtepartnerschaft Herzberg am Harz und Góra mit der Brückensprache Esperanto als Bindeglied [エスペラントを媒介とした独ポ姉妹都市], in: M. Borzyszkowska-Szewczyk & E. Szymańska (Hg.), *Nachbeben einer Zäsur in der interkulturellen Literatur und Kulturpraxis*, Vandenhoeck & Ruprecht (未刊行) .

[少数言語復興・再活性化]

Novaj ebloj por la ajnua lingvo: pri ĝia uzo en la Nacia Centro por revivigo de la ajnua kulturo[民族共生象徴空間ウポイにおけるアイヌ語使用], *Etnismo* 108 (2021).

「大学において手話言語を体験学習する意義」『複言語・多言語教育研究』9号 (2021)。

Strategije rěčneje koeksistencij we Łužicy: możnosće kreatiwnjeje a receptiwnjeje dwurěčnosće [ソルブ語とドイツ語の共存のための諸方略], *Přinoški sorabistskeje konferency (prov.)*, Universität Leipzig (未刊行) .

Znaczenie językowej domeny religii dla rozwoju języków regionalnych [地域語の発展にとっての宗教領域の意義 (カシュブ語とソルブ語、「ケセン語」の比較)], *Acta Cassubiana* 24 (未刊行) .

[宗教の社会的役割]

『脱原発の必然性とエネルギー転換の可能性—地震国日本の現実とドイツの先例から考える』(竹本修三と共著) 新教出版社 (2022)。

「コロナ危機における宗教の役割—ドイツのキリスト教会の場合」『上智ヨーロッパ研究』13 (2022)。

「信仰の証としての「土と農」—ドイツの教会の例から」『福音と世界』9月号 (2022)。